

# 被災地タクシー 幽霊を乗せて

## 初夏にコート姿「私は死んだのですか」

「震災による死」に人々はどう向き合い、感じてきたか。この春に卒業する東北学院大(仙台市)の社会学のゼミ生たちがフィールドワークを重ね、卒論を書いた。工藤優花さん(22)は、最大の被災地・宮城県石巻市のタクシー運転手たちが体験した「幽霊現象」をテーマに選んだ。

50代の運転手は工藤さんに、こう打ち明けた。

震災後の初夏。季節外れのコート姿の女性が、石巻駅近くで乗り込み「南浜まで」と告げた。「あそこはほとんど更地ですが構いませんか」と尋ねると、「私は死んだのですか」と震える声で答えた。驚いて後部座席に目を向けると、誰も座っていないかった。

別の40代の運転手。

やはり8月なのに厚手のコートを着た、20代の男性客だった。バックミラーを見ると、まっすぐ前を指さしている。繰り返し行き先を聞く。「日和山」とひと言。到着した時には、もう姿はなかった。

工藤さんは3年生の1年

## 死者への思い 大学生が卒論に

間、毎週石巻に通い、客待ちの運転手をつかまえては「震災後、気になる経験はないか」と尋ねた。100人以上に質問したが、多くの人は取り合わなかったり、怒り出したりした。それでも7人が、不思議な体験を語ってくれたという。

単なる「思い込み」「気のせい」とは言えないリアリティーがある。誰かを乗せれば必ず「実車」にメーターを切り替え、記録が残るからだ。幽霊は無賃乗車扱いになり、運転手が代金を弁償する。出来事を記した日記や、「不足金あり」と書かれた運転日報を見せてくれた人もいた。

乗せたのはいずれも比較的

若い男女。もし犠牲者の靈魂だとしたら——。「若い人は、大切な誰かに対する無念の思いが強い。やりきれない気持ちや伝えたくて、個室空間のタクシーを媒体に選んだのでは」と、工藤さんは考える。

証言した運転手がみな恐怖心ではなく、幽霊に畏敬の念を持ち、大切な体験として心にしまっていることも、工藤さんには印象的だった。多くの死者を出した石巻で、地域の悲しみを毎日感じとってきた。ある運転手は津波で身内を亡くした。「こんなことがあっても不思議ではない。また乗せるよ」と言う人もいた。

工藤さんは秋田県出身。それまで震災の犠牲者のことは「何千人」といった数字しかとらえていなかった。調査を通じて学ばされた。「一人一人の死の重みがあるということ。それを伝えたい」と話した。

◇ゼミは金菱清教授(40)が指導し、学生7人が参加した。仮埋葬された遺体の掘り起こしにあたった葬儀社員、我が子をなくし「記憶」を伝えるために慰霊碑を建てた母親などに、聞き取りをした。論文をまとめた本が、「呼び覚まされる霊性の震災学」の題で

近く、新曜社(東京)から出版される。(石橋英昭)



「幽霊」を題材に卒論を書いた工藤優花さん＝仙台市泉区